

地域イメージの生成に関わる風景体験の多元性に関する研究

—鉄道の車窓風景を対象とした写真投影法実験を用いて—

藤澤 奈緒[※]

Nao FUJISAWA

本研究では、人の風景体験は、無限の知覚の中からある眺めを特別なものとして選択し、同時に意味づけを行うことであると考えられる。またこの作用は人が地域全体に対して抱くイメージの生成と関係があると考えられる。この枠組みに従い、本研究では明知鉄道明知線の車窓風景を対象とした写真投影法実験を通して、異なる属性の被験者によって認知された風景の抽出と、それに対する意味づけの把握を行った。さらに、同じ被験者を対象に、地域に対して抱くイメージを問うアンケートを行った。これらのデータを併せて分析することにより、各被験者の風景体験がどのようなものであったかを、被験者間の相対的な差異を明確にすることによって明らかにした。

Keywords : 個人の風景、風景認識、地域イメージ、写真投影法、アンケート調査、車窓風景

1. 序論

1-1 背景

2004年に景観法が制定されて以来、全国の自治体で景観計画が策定されてきており、2012年8月現在で景観行政団体の数は562団体にも及ぶ¹⁾。かつては伝統的な街並みを残す街や有名な景勝地など、きわめて特殊といえる地域に限定されていた景観の議論が、現在では突出した特徴のないような地域においてもなされるようになってきているといえる。しかしこのような地域は、全体のイメージが掴みにくく、景観を論じる手がかりが見出しづらい傾向がある²⁾。さらにこのような地域においては、少しでも歴史的価値のあるものや少しでも珍しいものを取り上げて観光地化を図るなど、持続性に欠けると思われる計画も少なくない。その問題の背後には、景観の価値が「美しい」「歴史的」などといったシンプルな美的評価に関する言葉と即結びつけて考えられる傾向が往々にしてあるという事実が関わっていると考えられる。

集団に価値を共有されている風景は、元をたどれば、一個人によって「発見」され、それが絵画や詩歌など様々なかたちで表現されることで、様式的に固定された「型」として普及したものである。このことはこれまでも多くの論者によって主張されてきた。そして、これまで景観研究の中で議論されてきたものの多くはこの「集団の風景」にあたるものである。一方個人的風景は議論の対象とされることが少なかった³⁾。また個人が風景を認識するとはどのような現象であるのか、具体的には明らかになっていない。しかし前述のような背景を踏まえると、個人の風景に着目することに意義があるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、集団の風景が発生する元である個人の風景を重要な存在として位置づけ、決して特殊とはいえないありふれた地域の中で、様々な人が体験する風景を研究対象とする。

1-2 概念の整理

風景とは主体と環境との間の関係によって立ち表れるものであり、環境が風景として対象化される背景には、環境に対する主

体の「見方」（構え、態度）というべきものが関わっている。そして、「見方」に変化が生じることで、風景の「発見」が起こると考えられている。しかしこの「見方」や「発見」などといった言葉が、非常に概念的に扱われてきており、実際に、人が自然な状態で「風景を見ている」というとき、それはどのような現象として語ることができるのか、捉えづらいままでであるといえる。そこで、風景に関する次のような概念を、本研究において重要なものとして整理しておく。

1) 意識化されない風景

木岡⁴⁾は、人の風景認識を「基本風景」「原風景」「表現的風景」というひとつの階層構造として示した（図1-1）。これは、純粋に個人的な風景経験（基本風景）が、言語によって語られることで社会的に共有される「原風景」へと昇華され、さらに絵画などによって具現化されることによって「表現的風景」へと移行するという流れを示したものである。ここで着目すべきは「基本風景」という概念を据えたことである。木岡はこの「基本風景」を、「言語的媒介以前に即自的に生きられる風景、逆説的ながら、「誰の」という意識を伴わずに私によって生きられている風景」と定義している。このような風景は、眺めている本人にとって重要な意味を持つものではないが、地域での生活の中で確実に目にし、無意識のうちに記憶の中に蓄積されていくものである。

これを踏まえ本研究では、明確に意識化されることがなくても、人の内部に生きられる風景が存在するということを前提として考えていく。

2) 地域イメージの基本概念

人々の現実の行動と外的環境との間に概念的に存在する「イメージ」を先駆的に研究対象として扱ったK.リンチ⁵⁾は、「環境のイメージ」という言葉を「個々の人間が物理的外界に対して抱いている総合的な心象」と定義し、それは観察者が見るものを選択し、組み立て、意味づけを行いながら出来あがるものだとして述べている。

これに倣い本研究では、風景体験の枠組みは、以下に示す4つの段階により成り立っていると考える。

【A知覚】未だ風景として対象化されていない環境をただ無意識的に眺めている段階

【B選択】無限に知覚される眺めの中から特定の眺めを意識的に選択し、記憶に取り込む段階

【C意味づけ】認知した風景に意味づけし、秩序づける段階

【Dイメージ】断片的な風景が概念化され、地域に対する全体的なイメージが生成される段階

またこの過程は一方通行ではなく、人は地域で生活する中で自分の頭の中に既に形成されているイメージと照らし合わせながら風景を見ており、その度に記憶への取り込みとイメージの再構築を無意識的に繰り返していると考えられる。その点で、地域に対する全体的なイメージの存在も、本研究においては重要である。

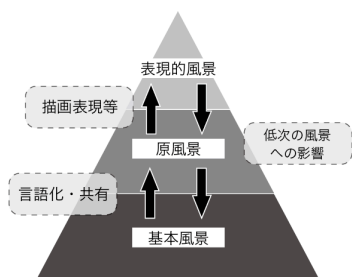


図1-1. 岡村による風景経験の構造 (文献1を元に筆者作成)

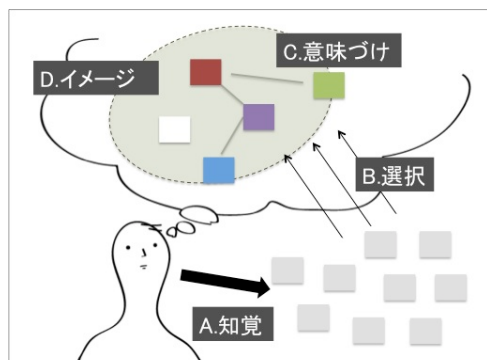


図1-2. 風景体験の枠組み

3) 本研究における風景体験の概念整理

以上より本研究では、個人による日常的な風景体験を、無限の知覚の中からある眺めを選択して認知することとして捉える。そしてその選択・認知と同時に、それが意識的にせよ無意識的にせよ何らかの意味づけが行われていると考える。またこの作用には地域内での経験の蓄積によって形成される地域イメージが関わっており、そのイメージもまた、集団に共有されているパブリックイメージに影響を受けている。またここでは地域イメージを、「ある地域に関する記憶、理解、印象の総体」として定義する。

1-3 目的

本研究の目的は、人が風景を認識するとき、その人の内部にお

いてどのようなメカニズムがはたっているかを探ることである。しかし風景体験や地域イメージの在り方は元来多元的なものであって、そもそも個人個人で枠組みが異なるため、その在り方そのものを取り出すことはほとんど不可能である。そこで、風景経験の多元性を前提としたうえで、人によって互いにどのような差異があるのかを具体的に明確にすることを考える。

2. 個人の風景体験を捉えるための方法論

2-1 既存研究と本研究の位置づけ

本研究は、人が地域をどのように見ているかという認識の仕方を明らかにする研究の中に位置づけられる。イメージマップ法を用いて空間的側面から都市のイメージを捉えたリンチの研究⁶⁾以後、エレメント想起法⁵⁾⁷⁾や写真投影法⁸⁾⁹⁾などを用いて、地域の中で重要視されている要素や好まれている要素を抽出することにより、意味的側面からイメージを捉える研究が多く行われてきた。これらの研究のほとんどは多くの人の地域認識に関するデータを統合し、最大公約数的なものから地域の特性を導き出すというアプローチがとられている。一方で本研究は、人の認識の構造が多元的であるということを前提とし、人によって多様な認識をそのまま多様なものとして捉えようとする点に特徴がある。この点では、吉村による風景体験の類型³⁾に関するものや原風景の生成メカニズムを扱った研究¹⁰⁾などを参考とする。

2-2 研究の方法

1) 個人によって体験される風景の抽出

本研究では、人が自然な状態で見ている風景を抽出することが不可欠であり、それらには言語によって語ることでできない段階のものや、明確には意識化されていない状態のものが含まれる。そこで、研究方法として写真投影法実験を採用する。この手法は被験者の能力などの差に依存することなく直感的なデータを得ることができるというメリットがある。

写真を撮るという行為は、無限にある瞬間の中から特定のシーンを選択して切り取るという意味に解釈できる。その瞬間にシャッターを切る背景には自身が意識しているか否かにかかわらず、必ず何らかのきっかけがあるはずであり、そのきっかけこそが、風景生成の要因であると捉えることができる。

実験の対象は、鉄道の車窓風景とする。その理由は、鉄道の乗車体験のもつ特徴として、風景が一定の速度で移り変わってゆく点、自力で移動したり運転したりしなければならない移動手段に比べてより客観的に風景を眺めることができるという点が挙げられ、この特徴を活かすことで人が直感的に捉えた風景を把握できると考えられるためである。また、鉄道は決められた軌道上を走行するため、同乗する乗客に共通の空間体験を提供する。よって同じ空間の眺めに対する異なる被験者の多様な

見方が抽出しやすいという特徴もある。

2) 地域に対するイメージの抽出

実験による風景の選択および意味づけとの関連を探るため、被験者が地域に対して抱くイメージも捉える必要がある。本研究では地域イメージは様々な要素を複合的に含んだ存在であるとする。その方法にはアンケート調査を用い、切り口の異なる幾つかの問いを設定する。(詳細は 6 章に述べる。)

2-3 研究の構成

本研究は、以下のような流れで行う。

まず写真投影法実験によって抽出したデータをもとに、それぞれの被験者が連続的な知覚から何を風景として選択し、それをどのようなものとして認識したかを把握する。これは風景体験の枠組みにおける【B 選択】【C 意味づけ】に関する分析である。3 章でまず実験の概要を述べた後、4 章で被験者による風景への意味づけ方の差異の分析、5 章では被験者ごとの風景の選択傾向を把握し、認識との関係を分析する。

次に 6 章でアンケート調査を行い各被験者の地域に対するイメージについて把握する。これは風景体験のうちの【D イメージ】に関連するものである。

3. 写真投影法実験の概要

3-1 研究対象地の概要

本研究の対象地は、岐阜県恵那市とする。写真投影法実験の対象路線は明知鉄道明知線とし、実験実施区間は恵那駅-明智駅間とする。明知線は、岐阜県恵那市と中津川市を通る全長約 25.1km の盲腸線である。



図3-1 明知線路線図(Google Mapに加筆) 図3-2 明知線駅名

恵那の中心市街地を出ると県道と並行しながら山地へと入ってゆき、飯沼駅を過ぎると峠をひとつ越し、農村景観の広がる岩村を走る。山岡を出て再び峠を越えると、野志の水田地帯の中を走ってゆき、坂を下り切った所で、かつて宿場町として栄えた明智に到着する。

対象路線および実験区間選定の主な理由は以下の 2 点である。

- 表定速度が約 32km/h と低速であり、写真撮影が行いやすい。
- 全国的に有名な観光資源などがなく、また単調な景観が続く区間が多い。

3-2 実験概要

1) 実験方法

【手順 1】被験者に GPS 機能付きのデジタルカメラを渡し、鉄道に乗車しながら気にとまった風景を直感的に、自由に撮影してもらう。撮影する基準は各自の判断に任せ、どのような動機で撮影してもよいこととする。また撮影枚数についても自由とする。実験で利用する列車は恵那発の下り線とし、撮影はすべて進行方向に対して右側の車窓から行う。

【手順 2】降車後、撮影した写真一枚一枚に対して、なぜその風景を撮影したかを被験者に記入してもらう。

2) 被験者

本実験では被験者として、地域との関わり方が異なる以下の 3 種類の属性を設定した。

表 3-1 被験者の属性

属性	説明
a 現在の利用者	日常的に明知線を利用している高校生
b 過去の利用者	かつて日常的に明知線を利用していたが、現在は利用しておらず、現在も地域に住み続けている者
c 来訪者	初めて地域を訪れ、過去に明知線の利用経験がない者

3) 実施条件

実施概要を、以下の表 3-2 に示す。実験は、現在の利用者 10 名、過去の利用者 6 名、来訪者 18 名の、計 34 名の被験者に対して行った。

表 3-2 実施条件

実施日	天候	乗車時刻	被験者人数
8/19(日)	晴	14:54-15:43	過去の利用者 5 名
8/20(月)	晴	17:14-18:03	現在の利用者 10 名および過去の利用者 1 名
8/28(火)	晴	13:50-14:40	来訪者 11 名
8/31(金)	晴	13:50-14:40	来訪者 7 名

3-3 実験結果

実験の結果、33 名の被験者 (b06 については、撮影された枚数と記述の数に著しいずれがあったため無効とした) より、計 864 枚の写真データとそれに伴う記述データを得た。ここから撮影に失敗したもの、車内の人物など車窓風景以外を撮影したもの、被験者本人がなぜ撮影したか忘れたものを無効と見なして 50 枚を差し引き、計 814 枚を有効なデータとして扱う。

表 3-3 各被験者の撮影枚数（有効データ数）

属性	被験者	年齢	枚数	属性	被験者	年齢	枚数
a 現在の利用者	a01	16	17	c 来訪者	c01	22	43
	a02	15	33		c02	20	14
	a03	16	13		c03	21	8
	a04	15	52		c04	20	12
	a05	16	35		c05	20	11
	a06	16	35		c06	21	15
	a07	16	7		c07	22	20
	a08	15	24		c08	22	30
	a09	16	12		c09	25	21
	a10	16	20		c10	23	31
b 過去の利用者	b01	63	18		c11	23	13
	b02	63	42		c12	22	20
	b03	60	43		c13	22	21
	b04	63	65		c14	21	12
	b05	54	14		c15	22	59
	b06	-	-		c16	22	14
					c17	22	21
					c18	21	19

3-4 風景体験の枠組みにおける本実験の意味

1) 本実験で得られるデータの意味

写真を撮影する行為は、鉄道での移動という一連の地域景観体験の中で無数の知覚からある特定の眺めを区別するという、風景の選択と収集を意味する。

また、写真に対する記述データは、被験者が選択・収集した風景が、自身にとってどのような意味のあるものかを示したものであり、これを個々人が風景に対してどのような意味づけをしているかを捉える手がかりとして考える。

2) 各属性の被験者にとっての本実験の意味

住民と来訪者とでは今回の実験に対する態度が根本的に異なると考えられる。住民の場合、これまでに地域の中での経験が蓄積されてきているため、既に地域に対する何らかのイメージが自分自身の中に存在している。そのため、既にあるイメージが、今回の実験の中で知覚される風景の見方にも影響を与えていると考えられる。よって住民被験者から得られたデータは、既存イメージの影響を受けていることを前提として見なければならぬ。一方来訪者は、この地域に関する知識や経験がほぼない状態でこの実験に臨んでいる。そのため来訪者から得られたデータは、これからこの地域に対するイメージを形成していく、最初の材料として考える。

4. 被験者ごとの風景への意味づけ方に関する分析

本研究で行った写真投影法実験では、撮影の基準を明確に設定していない。「風景」という言葉は非常に多義的なものであり、これをどのように捉え、それに伴ってどのようなものを撮影するかは被験者の自由な解釈による。

本章では各被験者が、風景を撮影した基準や動機は何であっ

たかを、記述データの分析により明らかにする。これは、被験者が無限に知覚する眺めの中から選択した風景が、本人にとってどのようなものとして捉えられているかという「意味づけ方」を捉えることである。ここでの分析は「記述の意味内容」と「記述の表現方法」の2つの観点により行う。

4-1 記述の意味内容による分析

1) 意味内容による記述の分類

被験者の記述を、意味内容をもとにすべての写真を13タイプに分類し、さらに風景生成のメカニズムが似ていると考えられるもの同士をまとめて5つのカテゴリに大別した（表4-1）。

[I. 絵画的に認識される風景]

写真にうつっている範囲内の風景全体や特定の対象物に関する説明や描写がされているものをここに分類した。これは主体が積極的に意味付けしているものではなく、主体が不意に反応させられることによって立ち表れる風景であるといえる。そのように考えると、地域に関する何らかの情報を、視覚を通して主体に教えたり読み取らせたりするはたらきをしていると捉えることができる。またこれらの風景は、特定の地域（ここでは明知鉄道沿線地域）という文脈において、環境と眺めの主体との間の関係が自覚されていないものであるといえる。

[II. 定位感覚を伴う風景]

撮影地点を表す言葉を用いて説明しているものをここに分類した。これらの風景は、地域に関する主体の知識や経験に裏付けられた、場所の概念と結びつけられており、自分のいる位置を捉える定位感覚と関わっていると考えられる。

[III. 個人の内面に基づく風景]

撮影した風景を自身の体験と結びつけて説明しているものや、「いつも見ている風景」「なつかしい風景」など自分の記憶やイメージの中にある風景を基準として語られているものをここに分類した。これらの風景は、生成の要因が主として主体側にあると考えられ、主体が風景に対して意味づけしようとする態度が表れているとすることができる。

[IV. 環境により認識させられる風景]

過去に見た風景と変化したという内容の記述があるものをここに分類した。これらの風景は、生成の要因が主として環境側にあると考えられ、環境側の状態が変化したことによって主体はそれに気づかされ、初めて風景として意識づけられるという、受動的な見方であるといえる。

[V. 言語化できない風景]

撮影した風景を言語表現できていないものをここに分類した。

表 4-1 記述内容による分類

記述内容		被験者による記述の特徴	記述例 ※0内は被験者番号/図-3 中の写真番号
I. 絵画的に認識される風景	①視対象	撮影した風景を一般名詞のみで表しているものや、写っている具体的な物の名称のみが記述されているもの	・田(c15/写真①-1) ・阿木ダム(b3/写真①-2)
	②状態	撮影した風景の状態を、客観的な表現で説明しているもの	・草がのびていたから(a3/②-1) ・道が遠々と続く(c15/②-2)
	③印象・評価	撮影した風景の主観的な印象や評価等が記述されているもの	・田舎といつかんじでいい(a6/③-1) ・山のりんかくが好き(c13/③-2)
	④想像力	撮影した風景からその背後にあるものに想像・思考を巡らせているような記述があるもの	・野志で降りた人。次の列車まで待っているのかな？(b4/④-1) ・田んぼが段になっているその様は、(略)山に囲まれた土地だからその風景(c18/④-2)
II. 定位感覚を伴う風景	⑤到着駅の記録	到着した駅を記録的に撮影し、その駅名だけが記述されているもの	・いわむら駅(c10/⑤)
	⑥地名による定位	撮影した風景を、撮影地点の地名を用いて表現しているもの	・東野車窓風景(b1/⑥-1) ・飯羽間へ入るところ(b2/⑥-2)
	⑦付近の施設等による定位	撮影した風景を、撮影地点の近くにある施設等およびそれとの位置関係を示す言葉を用いて表現しているもの	・恵那高の近く(b2/⑦-1) ・この奥にそば屋がある(b4/⑦-2)
	⑧地形による定位	撮影した風景を、移動によって連続的に体験される地形の変化の中での現在位置を示す言葉を用いて表現しているもの	・これから山の谷へ向かっていく(b5/⑧-1) ・山合いを抜けた風景(b5/⑧-2)
III. 個人の内面に基づく風景	⑨個人的基準による定位	位置を把握するために個人的に目印にしている風景であると判断できる記述があるもの	・朝、この看板を見て「降りなきゃ〜」と思う(a4/⑨-1) ・よし、やるか〜と思う所(a7/⑨-2)
	⑩自身の経験	自分自身や身近な知人に関する記述や、過去の体験についての記述があるなど、被験者とその風景との具体的な関係が判断できるもの	・昔よく魚つかみした岩村川(b4/⑩-1) ・友の家が見えたから(a10/⑩-2)
	⑪記憶の風景との照合	「いつも見ている」「懐かしい」あるいは「初めて見た」などという記述があり、自分自身の記憶やイメージの中にある風景を基準として見ていると考えられるもの	・いつも見ている工場のけむりが見えたから(a1/⑪-1) ・昔見た風景(b4/⑪-2)
IV. 環境により認識させられる風景	⑫環境の変化	「以前と変わった」「いつもと違う」などという記述があり、環境が変化したことと風景として意識化されていると考えられるもの	・阿木川もきれいにこなった(b4/⑫-1) ・いつもとちがって水がとまっていたから(a5/⑫-2)
V. 言語化できない風景	⑬言語化できない	撮影した風景を言葉で表現できないもの	・なんとなく(a9/⑬)

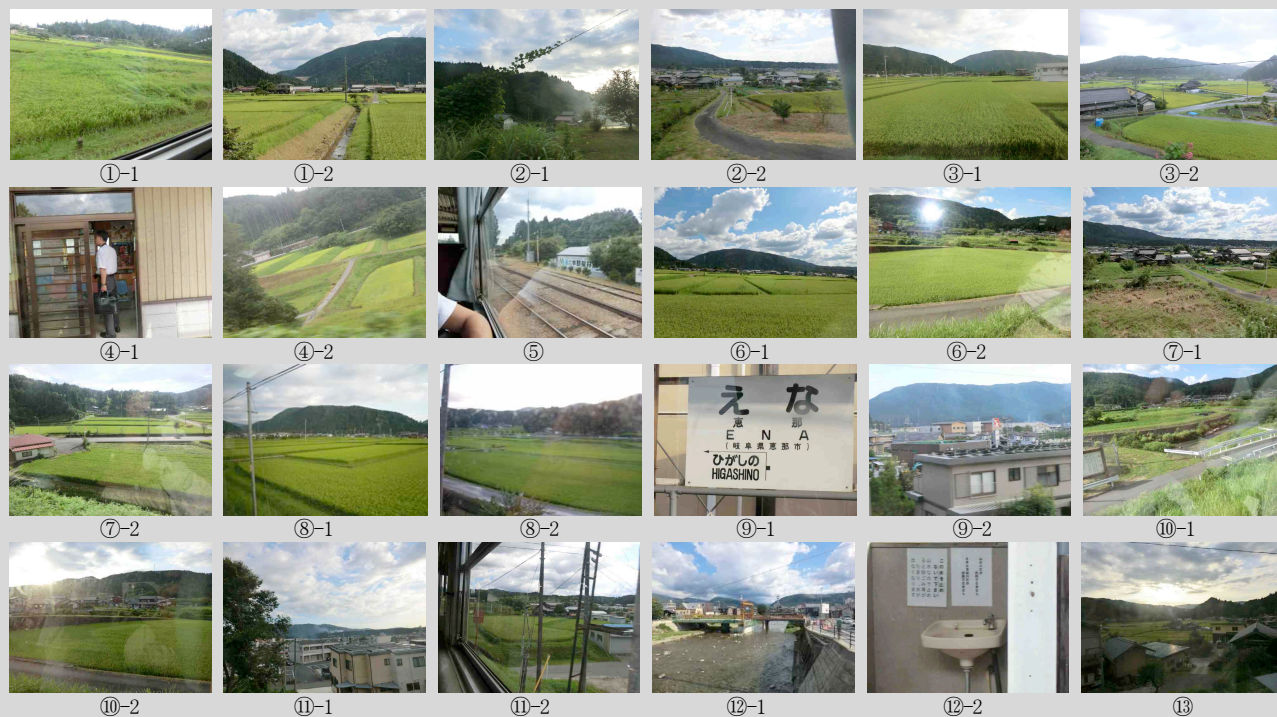


図 4-1 撮影された写真例一覧

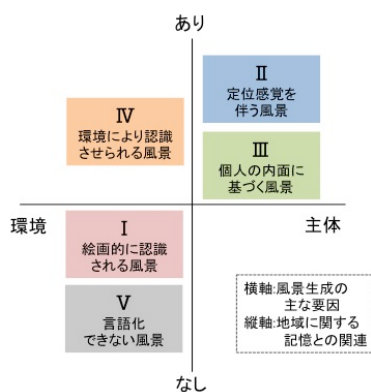


図4-2 各記述タイプの関係図

以上の5つのタイプを、風景生成の主要因が環境側と主体側とのどちらにあるか（横軸）、また地域に関する記憶や知識と関係のあるものか否か（縦軸）という2軸によって区別すると、図4-2のように表すことができる。

2) 記述の意味内容に基づく被験者の分類

各被験者によるすべての記述の中に、分類した13タイプがどのような割合で含まれているか（図4-3）を調べた結果、すべての被験者を次の5タイプに分類することができた（表4-2）。

〔定位特化型〕

撮影したもののほとんどが〔II. 定位感覚を伴う風景〕に該当する被験者を定位特化型とした。このタイプにはb02とb05が該当する。このタイプに属する被験者は、風景を、地域の中の場所を表すものとして意味付けしている。

〔定位+絵画的認識複合型〕

撮影したものの内訳が、大きく分けて、〔II. 定位感覚を伴う風景〕と絵画的に認識される風景の2種類になっている被験者を、定位+絵画的認識複合型とした。このタイプにはb01とb03が該当する。これらの被験者も、風景を地域の中の場所を表すものとして意味付けしていると考えられる。

〔経験・記憶特化型〕

撮影したもののほとんどが〔III. 個人の内に基づく風景〕に該当する被験者を経験・記憶特化型とした。ここにはa05とa07が該当し、共に〔⑨個人的基準における定位〕の占める割合が多いことが特徴である。このタイプに属する被験者にとって、風景は自身の生活や記憶と密接に結びついている存在であると考えられる。

〔経験・記憶+絵画的認識複合型〕

撮影したものの内訳が、大きく分けて、〔III. 個人の内に基づく風景〕と〔I. 絵画的に認識される風景〕の2種類になっている被験者を、経験・記憶+絵画的認識複合型とした。このタイプには4名の住民が属し、a02・a04・a08・b04は〔⑩自身の経験〕、

a01は〔⑪記憶の風景との照合〕がそれぞれ多く見られる。これらの被験者にとっても、風景は自身の生活や記憶と密接に結びついている存在であると考えられる。

〔絵画的認識特化型〕

撮影したもののほとんどが〔I. 絵画的に認識される風景〕に該当する被験者を絵画的認識特化型とした。ここにはa03・a06・a09・a10と、すべての来訪者（c01-c18）が該当する。これらの被験者は基本的に、地域についての記憶や知識とは切り離して風景を見ていると考えられる。

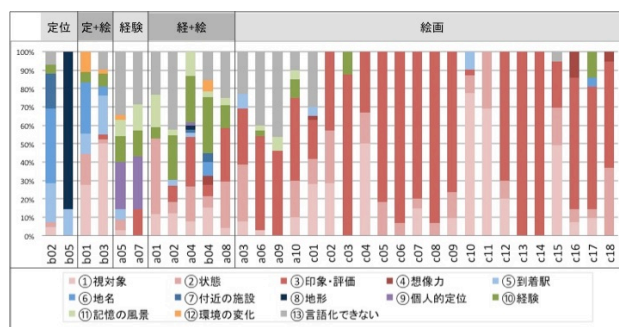


図4-3 被験者ごとの内訳（横軸：被験者番号）

表4-2 風景への意味づけ方による被験者の分類

記述内容タイプ	該当する被験者
定位特化型	b02, b05
定位+絵画的認識複合型	b01, b03
経験・記憶特化型	a05, a07
経験・記憶+絵画的認識複合型	a01, a02, a04, a08, b04
絵画的認識特化型	a03, a06, a09, a10 およびすべての来訪者（c01-c18）

a: 現在の利用者, b: 過去の利用者, c: 来訪者

3) 記述の意味内容による被験者分類のまとめ

分類の結果、住民と来訪者として明確な差があることが明らかになった。来訪者のデータはほとんど全てが〔I. 絵画的に認識される風景〕であるのに対し、住民の場合はひとりの被験者の中にも多様な種類のものが含まれている。来訪者には、基本的にこの地域に関する知識や経験の蓄積が存在しない。ゆえに、この地域の風景と場所の感覚を結びつけたり、具体的な記憶と関連づけたりすることは不可能であるため、このような内訳になることは必然的であると言える。これに対して住民は、この地域で生活する中で様々な知識や経験を獲得してきており、そのため多様な意味において地域の風景を見ることができるようになってきていると考えられる。

また、住民の中にも意味づけ方の種類が多い者もあれば、一貫している者もある。しかしこれは地域内での経験の豊富さとは必ずしも比例しているといえず、したがってこの結果は、制約のない状態で自由に風景を選択・収集させたときに、自身の中にある多様なモードのうちのどのようなものが現れたかを示しているものと捉えるべきである。

4-2 記述の表現に基づく絵画的認識型被験者の分類

記述の意味内容に着目した分類は地域に関する知識や経験を土台としているため、この方法だけでは、特に来訪者の風景の認識の特徴の差異を適切に表現することができなかった。そこで、次は [I. 絵画的に認識される風景] に着目し、これに該当する記述の表現を詳細に見ることにより、被験者間の差異をより明確に把握することを目的とする。

1) 絵画的に認識される風景の表現に着目した記述の分類

すべての被験者の記述の中で、[I. 絵画的に認識される風景]にあたる526の記述を抽出し、その表現に着目して表4-3のように詳細分類した。この分類は、特定の視対象の有無および表現の抽象度という観点で行った。

表4-3 I. 絵画的に認識される風景の再分類

具体的 ↑ ↓ 抽象的	特定の視対象	1. 特定の視対象についての描写 2. 視対象の指摘および周囲との関係 3. 空間の状態の描写	視対象 空間描写
	風景全体	4. 風景を表す一般名詞を用いた描写 5. 風景への印象のみの記述	抽象的表現

2) 記述表現に基づく被験者の分類

表5-1の分類に従って、各被験者の記述の内訳を調べた。これらの被験者を次の4つのタイプに細分化できることが分かった。※ただし、[定位特化型]と[経験・記述特化型]に属する4名の被験者については[I. 絵画的に認識される風景]にあたる記述が非常に少ないため除外している。

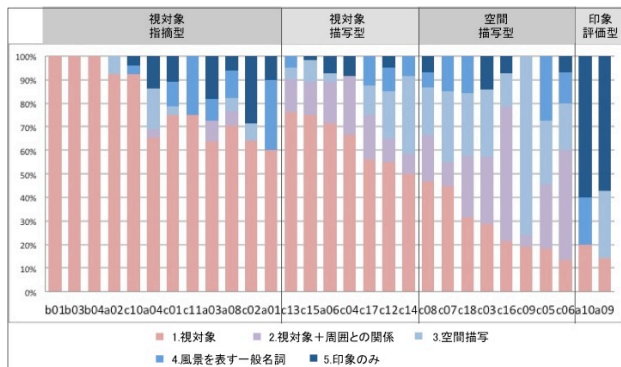


図5-1 絵画的認識型被験者の記述内訳

[視対象指摘型]

記述が、主に特定の視対象についてのものと、抽象的な風景描写の2種類で構成されているものを視対象指摘型とする。このタイプには、住民と来訪者の両方が含まれていた。

[視対象描写型]

主に特定の視対象についてのものと、空間描写の2種類で構成され、うち視対象についての記述が全体の半数以上を占めるものを視対象描写型とする。ここに属するのは来訪者のみであった。

[空間描写型]

主に特定の視対象についてのものと、空間描写の2種類で構成され、うち視対象についての記述の占める割合が半分未満のものを空間描写型とする。ここに属するのは来訪者のみであった。

[印象評価型]

風景全体に対する抽象的な記述が過半数を占めるものを印象評価型とする。このタイプに属するのは住民のみであった。

表5-2 絵画的に認識される風景の記述表現に基づく被験者分類

表現タイプ	被験者
視対象指摘型	a01, a02, a03, a04, a08, b01, b03, b04, c01, c02, c10, c11
視対象描写型	a06, c04, c12, c13, c14, c15, c17
空間描写型	c03, c05, c06, c07, c08, c16, c18
印象評価型	a09, a10

a: 現在の利用者, b: 過去の利用者, c: 来訪者

3) 記述の表現による被験者分類のまとめ

分類の結果、特定の視対象のみに着目する傾向のある者と、風景全体へ意識が向いている者に分かれることが分かった。また風景全体を見ている被験者でも、その空間構造への関心が強い者と、全体的な印象を記述している者がいることが分かった。

4-3 本章のまとめ

本章では記述データの分析から、風景の意味づけ方の違いにより被験者を分類した。4-1と4-2、それぞれの分類結果を合わせたものを、表4-4に示す。

表4-4 記述内容および表現に基づく被験者分類

記述内容	表現	被験者
定位特化型	-	b02, b05
定位+絵画的認識複合型	視対象指摘型	b01, b03
経験・記憶特化型	-	a05, a07
経験・記憶+絵画的認識複合型	視対象指摘型	a01, a02, a04, a08, b04
絵画的認識特化型	視対象指摘型	a03, c01, c02, c10, c11
	視対象描写型	a06, c04, c12, c13, c14, c15, c17
	空間描写型	c03, c05, c06, c07, c08, c09, c16, c18
	印象評価型	a09, a10

a: 現在の利用者, b: 過去の利用者, c: 来訪者

5. 風景の選択と認識に関する分析

ここまでで、被験者ごとの風景の認識のしかたの差異が具体的に明らかになった。本章では、実験において被験者が写真の被写体として何を選択する傾向にあったかを把握するとともに、その選択のしかたが風景の認識とどのような関係があるかを探ることを目的としている。ここでの分析には写真データとそれに対応する記述データの両方を用いる。

5-1 撮影地点の景観タイプによる分析

1) 景観タイプの分類

被験者に撮影されたすべての写真がそれぞれどのような景観

の場所であったかを、図5-1 に示すフロー図に沿って判断した。
表 5-1 の集計結果を見ると、景観タイプが農村の地点で撮影された写真が突出して多いことが分かる。

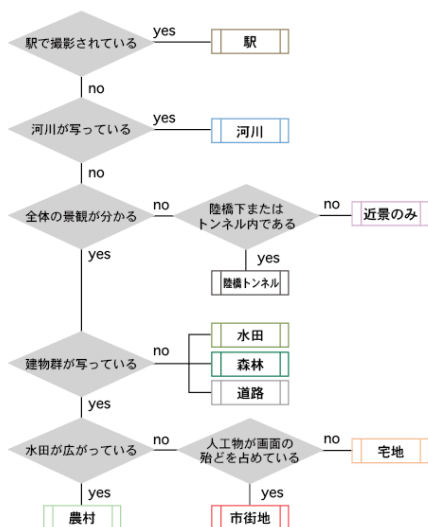


図5-1 景観タイプ分類のフロー図

表 5-1 景観タイプごとの写真枚数

景観タイプ	写真枚数	景観タイプ	写真枚数
農村	290	市街地	34
水田	52	駅	157
森林	27	河川	27
道路	51	近景のみ	116
宅地	49	トンネル陸橋	10

2) 景観タイプに基づく各被験者の撮影傾向

各被験者が撮影した写真の中に、各景観タイプがどれだけの割合で含まれているかを示したグラフが、図5-2である。全データを平均すると、農村および水田の風景が40%程度、次いで駅での撮影が20%程度となっているが、この平均値との差異に着目して傾向の似ている被験者同士をまとめると、表5-2のようになる。

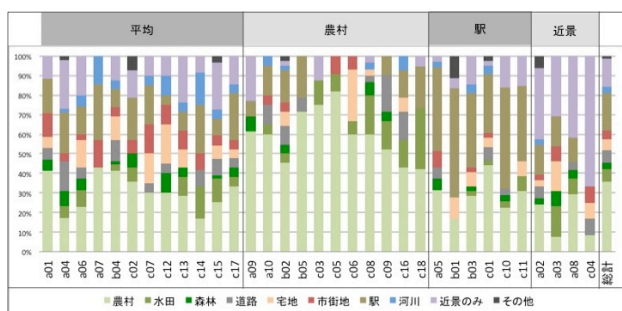


図5-2 各被験者の撮影地点の景観タイプ内訳

表5-2 写真データの景観から見る被験者の特徴

撮影傾向	被験者
平均値に近い	a01, a04, a06, a07, b04, c02, c07, c12, c13, c14, c15, c17
農村や水田の風景が際立って多く、全体の50%以上を占める	a09, a10, b02, b05, c03, c05, c06, c08, c09, c16, c18
駅の風景が多く、全体の30%以上を占める	a05, b01, b03, c01, c10, c11
近景のみのものが全体の30%以上を占める	a02, a03, a08, c04

a: 現在の利用者, b: 過去の利用者, c: 来訪者

5-2 撮影対象と記述内容との関係

次に、すべての写真一枚一枚について、特定の撮影対象の種類および景観タイプと、それに対する記述を併せて見ることで、各被験者がどのような対象に対してどのような意味づけをしているかという基準を明らかにする。分析は、4章での被験者分類タイプをもとに行った。ここではその分析結果を幾つか具体例を示しながら説明する。

1) 経験・記憶+絵画的認識複合型の被験者の特徴

[経験・記憶+絵画的認識複合型]の被験者は、記述表現による分類ではすべての人が[視対象指摘型]に該当した。つまりこのタイプに属する者は、記述の内訳が主に[Ⅰ. 絵画的に認識される風景][Ⅲ個人の内面に基づく風景][Ⅴ言語化できない]の3種類で、特定の視対象にのみついて言及する傾向のある被験者である。[Ⅲ]の記述に対応する視対象は自身と関わりのある家屋や道路、駅舎などが多かったのに対し、[Ⅰ]に対応する視対象は人や車、空、太陽、煙など偶然その時あったものが多いことが分かった。また[Ⅴ]について見てみると、風景全体を撮影したものが多い傾向があった。この結果から、普段から常に意識的に見ているものについては[Ⅲ個人の内面に基づく風景]として確信的に選択し、普段の眺めとは異質なものに反応した結果として[Ⅰ 絵画的に認識される風景]を撮影し、また特に意識化しているわけでもないが見慣れた風景を[Ⅴ言語化できない風景]として撮影したと推察される。

2) 農村風景を多く選択した被験者の特徴

図5-2で、農村や水田の風景ばかりを撮影する傾向にあった被験者はすべて、記述タイプで[定位特化型]もしくは[絵画的認識特化型]のうちの[印象評価型][空間描写型]のいずれかに該当していた。被写体が一貫していることから、これらの被験者はその場で風景に反応したというよりも、ある程度意識的に風景を選択したと考えられる。

[印象評価型]は住民のみに見られ、風景に対する印象のみの記述が多いタイプであったが、それらの記述を詳しく見ると、同じ意味の言葉が繰り返し使用されている傾向があった。例えばa10の記述は「田舎」「自然」という言葉が頻繁に見られる。このことから、地域全体に対して抱いているステレオタイプのイメージに合致する風景を意図的に選択したものと考えられる。

一方[空間描写型]は来訪者のみであり、風景全体の空間構造への意識が強いタイプであった。地域を初めて体験するにもかかわらず一貫して似た対象を意図的に撮影していることから推測すると、知識として持っている一般的な農村地域のプロトタイプの眺めに合致する風景を、確認するように撮影したと考えられる。また、同じ来訪者の比較対象として[視対象描写型]についても見

表 6-3 各被験者の撮影対象とそれに対応する記述の関係

属性	被験者	枚数	景観	記述内容	表現	[Ⅰ 絵画的認識]として選択された対象	[Ⅱ 定位]として選択された対象	[Ⅲ 経験・記憶]として選択された対象	[Ⅴ 言語化できない]として選択された対象
a 現在の利用者	a01	17	平均	経+絵	視対象指摘	偶然あった物	-	?	?
	a02	33	近景	経+絵	視対象指摘	偶然あった物 鉄道関連	-	意識化されている物	見慣れた風景?
	a03	13	近景	絵画	視対象指摘	偶然あった物	-	-	見慣れた物
	a04	52	平均	経+絵	視対象指摘	偶然あった物	-	意識化されている物	-
	a05	35	駅	経験	-	-	-	意識化されている風景	見慣れた風景
	a06	35	平均	絵画	視対象描写	意識化されている物	-	-	見慣れた物
	a07	7	平均	経験	-	-	-	意識化されている風景	?
	a08	24	近景	経+絵	視対象指摘	偶然あった物	-	意識化されている物	見慣れた風景
	a09	13	農村	絵画	印象評価	代表的風景	-	-	?
	a10	20	農村	絵画	印象評価	代表的風景	-	-	-
b 過去の利用者	b01	18	駅	定+絵	視対象指摘	鉄道関連	駅	-	-
	b02	42	農村	定位	-	-	代表的風景	-	-
	b03	42	駅	定+絵	視対象指摘	ランドマーク	駅	-	-
	b04	65	平均	経+絵	視対象指摘	ランドマーク 偶然あった物	-	意識化されている物	?
	b05	14	農村	定位	-	-	代表的風景	-	-
c 来訪者	c01	43	駅	絵画	視対象指摘	鉄道関連	-	-	プロトタイプの風景?
	c02	14	平均	絵画	視対象指摘	気にとまった物	-	-	-
	c03	8	農村	絵画	空間描写	プロトタイプの風景	-	-	-
	c04	12	近景	絵画	視対象描写	気にとまった物	-	-	-
	c05	11	農村	絵画	空間描写	プロトタイプの風景	-	-	-
	c06	15	農村	絵画	空間描写	プロトタイプの風景	-	-	-
	c07	20	平均	絵画	空間描写	気にとまった風景	-	-	-
	c08	30	農村	絵画	空間描写	プロトタイプの風景	-	-	-
	c09	21	農村	絵画	空間描写	プロトタイプの風景	-	-	-
	c10	31	駅	絵画	視対象指摘	鉄道関連	-	-	-
	c11	13	駅	絵画	視対象指摘	鉄道関連	-	-	-
	c12	20	平均	絵画	視対象描写	気にとまった物	-	-	-
	c13	21	平均	絵画	視対象描写	気にとまった物	-	-	-
	c14	12	平均	絵画	視対象描写	気にとまった物	-	-	-
	c15	59	平均	絵画	視間描写	気にとまった物	-	-	-
	c16	14	農村	絵画	空間描写	プロトタイプの風景	-	-	-
	c17	21	平均	絵画	視対象描写	気にとまった物	-	-	-
	c18	19	農村	絵画	空間描写	プロトタイプの風景	-	-	-

てみると、撮影地点の景観タイプも具体的な撮影対象も様々で、特に一貫性が見られなかった。つまりこれらの被験者はその場で気にとまった物を記録的に撮影していたと考えられ、[空間描写型]とは明らかに風景選択の態度が異なっていたことが分かる。

3) ランドマークを多く選択した被験者の特徴

過去の利用者b03とb04は共に[視対象指摘型]で、[Ⅰ 絵画的に認識される風景]として、阿木川ダムや温泉施設、記念碑など、多くの人に認知されているランドマークを多く選択する傾向にあった。これはその場で反応して撮影したものとは考えにくく、これらが地域においてランドマークであるという知識の影響があり、客観的な立場での意識的な選択のしかたであるといえる。

5-3 本章のまとめ

以上より、記述と撮影対象の関係に着目することで、被験者による風景選択に関わる態度の差異が明確になった。特に[Ⅰ 絵画的に認識される風景]は、記述あるいは被写体だけを見れば同じ

ものでも、相対的に見るとそれを撮影した意味合いは被験者によってばらつきがあることが分かった。

以上、ここまでで明らかにしてきた被験者ごとの風景体験の特徴を、表5-3にまとめる。

6. アンケート調査による地域イメージの把握

ここでは、アンケート調査を用いてそれぞれの被験者がこの地域に対して抱くイメージについて把握することを目的とする。3-3で述べたように、ここで捉えるイメージは、属性によって異なるものである。

6-1 アンケート調査の概要

1) アンケートの内容

アンケートの設問は表6-1に示した全6問で、このうち設問1～3は、別紙「明知鉄道の車窓風景一覧」を見ながら答えるものである。この別紙は、写真投影法実験で全被験者が撮影した814枚の写真から、景観タイプや撮影地点の異なる30枚を選定し一覧

にしたものである。

全6問中、住民からはすべての設問に対する回答を、来訪者からは設問1・2・5のみに対する回答を得た。

2) 実施概要

アンケートは、写真投影法実験の実施から約4ヶ月後の、2011年12月から2012年1月にかけて実施した。住民（現在の利用者および過去の利用者）に対しては郵送により配布し、来訪者に対しては直接またはメールにより配布した。

表6-1 アンケートの設問内容

設問	設問内容
1	30枚の写真の一枚一枚について、見覚えがあるか、その度合いを問う。(確実に見覚えがあるものに◎、不確かだがなんとなく見覚えがあると思うものに○、見覚えがないものに×)
2	30枚の写真の中から、明知鉄道沿線地域全体を代表する風景を5つ選択してもらう。
3	この30枚の写真の中に、以下の項目に当てはまるものがあるかどうかを問う。 ①本人や知人の、家もしくは職場、学校などが写っている ②日常的に、徒歩や車、自転車などでよく通る道が写っている ③行ったことのある店や施設が写っている ④子供のころ遊んだことのある場所が写っている ⑤その他、思い出のあるものが写っている
4	3枚の写真（別紙の30枚に含まれないもの）について、その風景の場所を言葉で説明してもらう。
5	明知鉄道沿線地域全体のイメージに合う表現を、14種類の言葉の中から3つ選択してもらう。
6	普段の行動範囲を問う（地図上への書き込み）。

表6-2 アンケート実施概要

被験者	配布方法	実施期間	回収数/配布数
現在の利用者	郵送配布	2011年12月21日送付	7/10
過去の利用者		2012年1月7日返送〆切	4/5
来訪者	直接配布またはメール配布	2012年1月8日～18日	17/18

6-2 アンケート結果からの考察

アンケートの結果により明らかになった幾つかの項目について、以下に述べる。

1) 地域のパブリックイメージ

設問5についての回答結果（表6-3）を見ると、明知鉄道沿線地域を表す言葉として「自然豊かな地域」「のどかな地域」「田舎の地域」の3つに、属性に関わらず回答が集中している。

表6-3 設問5の回答結果

選択肢	計	選択肢	計
自然豊かな地域	20	寂しい雰囲気のある地域	1
のどかな地域	19	整然とした美しさのある地域	1
田舎の地域	18	歴史が感じられる地域	1
なつかしさをを感じる地域	7	にぎわいのある地域	0
風情のある地域	6	どこにでもありそうな地域	0
癒しの感じられる地域	5	個性的な地域	0
壮大な雰囲気の地域	3	雑然とした地域	0

また設問2に対する回答結果（表6-4）を見ると、どの回答者も選択した5枚の中に、農村風景の写真を必ず1枚は含めていることが分かる。このことから、農村風景は多くの人にこの地域の代表景として認識されているといえる。

表6-4 各被験者が選んだ代表景の景観タイプ（設問2）

住	代表景					来	表現	代表景				
a02	農	農	道	街	川	c01	視指摘	農	農	農	農	森
a03	農	農	街	ラ	川	c02	視指摘	農	農	農	農	田
a04	農	農	街	ラ	ラ	c03	空描写	農	農	農	田	田
a05	農	道	街	街	ラ	c04	視描写	農	農	田	森	森
a08	農	農	農	宅	街	c05	空描写	農	農	農	農	川
a09	農	農	田	街	ラ	c06	空描写	農	農	田	田	森
a10	農	農	農	農	田	c07	空描写	農	農	農	田	川
b01	農	農	宅	ラ	川	c08	空描写	農	農	農	森	ラ
b02	農	農	農	ラ	川	c09	空描写	農	農	農	農	道
b03	農	農	ラ	ラ	川	c12	視描写	農	農	農	田	川
b05	農	田	田	田	道	c13	視描写	農	農	田	田	川
【凡例】 ■農村 ■宅地 ■水田 ■市街地 ■森林 ■ランドマーク ■道路 ■河川						c14	視描写	農	農	田	田	道
						c15	視描写	農	農	街	街	ラ
						c16	空描写	農	農	農	森	森
						c17	視描写	農	農	農	田	川
						c18	空描写	農	農	田	田	田

2) 被験者による代表景の捉え方の差異

設問2の結果（表6-4）を見ると、代表景の選択のしかたによって被験者をおおむね2種類に分けることができる。図6-1はその選択傾向の異なる二人の被験者が選んだ写真を例として示したものである。c18は景観タイプが[農村]や[水田]にあたる写真ばかりを選んでおり、似たような選択をする者は来訪者に多い。一方a04は市街地やランドマークなど、眺めの性質が異なる写真を織り交ぜて選んでいる者で、これは住民に多い選び方である。



図6-1 a04とc18の代表景選択傾向の比較

この結果から考えると、「地域を代表する風景」という言葉の捉え方が人によって二通りに分かれていると言える。水田や農村風景ばかりを選択した被験者は、この言葉を視覚的なイメージとして捉えたと考えられる。

一方ランドマークや、自身を含む人々の生活と関連の深い風景を選んでいる被験者は、意味的側面を重視したと考えられる。ランドマークは住民だけでなく周辺地域に住む人々にも認知されており、集客や話題の核となっているという知識が背後にあることや、市街地やスーパーが自分自身や他の住民にとって生活に欠

かせない存在であるという意識があることなどが影響していると考えられる。

そして、写真投影法実験では著名なランドマークを撮影対象としてあまり選択していなかった現在の利用者（高校生）が、代表景の選択ではランドマークを挙げているケースが多かったことも、特筆すべき点である。つまり、地域の代表景を選べという、客観的な視点を要求される問いに対しては一般的に人によく認知されているものを答えるが、そのような制約がない状態ではこれらはあまり優先的に選択されないということが言える。

さらに、来訪者の回答結果にも着目すると、河川や道路、市街地など、農村とは少し異質なものを含めている回答が[視対象描写型]に属する被験者に多いという傾向があることが分かった。[視対象描写型]の来訪者が、[視対象指摘型]や[空間描写型]の来訪者と比較してより多様なタイプの景域で撮影する傾向があったことから考えると、納得のできる結果である。このことから、一回の乗車体験における風景の選択のしかたの違いによって、生成されるイメージにも違いがあった可能性があると考えられる。

3) 住民の定位感覚および風景に関する記憶

設問3は、住民に対して、自身の経験や習慣と結びつけられる風景の有無を問うものであるが、この設問について無回答の者は一人もいなかった。また設問4は提示した3枚の写真の場所を問うものであったが、難易度の高かった1枚を除く残りの2枚に関してはすべての住民が正しく答えられていた。

このことから、4章での記述内容の分析には定位あるいは経験・記憶に関する記述が見られなかった被験者にも、風景を場所や経験と結びつけて捉える見方が存在していたことが分かる。

6-3 本章のまとめ

本章では、被験者の中に、実験においては現れることのなかった、風景の見方が存在することが明らかになった。このことから、本人の中に形成されている地域イメージは、複合的な側面から成り立っているといえる。

7. 結論

7-1 本研究の成果

本研究の成果を、以下にまとめる。

- ・ 住民によるデータの分析結果から、選択したすべての風景に対して意識的に明確な意味づけをしていた者はわずかであり、通常の状態での風景体験では、いつでも意識化して見ることのできる風景もあれば、半ば無自覚的な風景も混在しているということが分かった。

- ・ 人には風景を見るモードというものが存在しており、今回の一度の実験におけるモードが常にどんな時と場合においても現れるわけではないという可能性が示唆された。
- ・ 地域の風景を初めて体験する来訪者にとって、地域に関するイメージを一から形成していく最初の段階として[絵画的に認識される風景]の存在が重要であり、また同じ絵画的認識でも人によって風景の中のどのような要素に着目しているかは差があることが分かった。そしてその差異は、一度の乗車体験の結果として形成されたイメージの在り様の差異としても現れていると考えられるデータが得られた。

7-2 今後の展望

本研究では被験者として3種類の属性を設定したが、属性ごとに年齢層が偏っていたため、今後は同じ属性でも年齢層の異なる人物に対しても実験を行う必要がある。

また、今回は撮影した写真に対してひとことで簡潔に記述させたため、基本的には一枚の写真に対してひとつの意味づけしか抽出できなかった。しかしひとつの風景に対して複数の意味づけができるケースも大いに考えられるため、より長い文章での記述や、あるいは発話などによって意味づけに関するデータを抽出すると、より多様な結果が得られると予測される。

さらに、本研究では決して特殊とは言えないような農村地域を対象としたが、たとえばより都市的な地域など他の地域においても同様の実験を行うことで、地域の特性と、人の風景体験との関係も明らかにすることができると考えられる。

<参考文献>

1. 国土交通省HP（閲覧:2012年1月30日）
2. 佐々木葉:「間にある都市」の景観デザインへ、景観・デザイン研究講演集No. 2, pp. 185-191, 2006
3. 吉村晶子:風景/景観に関する言説にみる景観概念、風景体験類型及び説明モデルに関する研究、景観・デザイン研究講演集No. 3, pp. 76-86, 2007
4. 木岡伸夫:風景の論理 沈黙から語りへ、世界思想社,2007
5. K.リンチ著、丹下健三・富田玲子訳:都市のイメージ 新装版、岩波書店,2007
6. 角野幸博:地域イメージの構成要素に関する研究-大阪府南部地域を事例に-,第16回日本都市計画学会学術研究論文集 pp.373-378,1981
7. 志水英樹:街のイメージ構造、技報堂,1979
8. 久隆浩:子どもと地域空間の関わりを分析する手法としての写真投影法の試み,1992年度第27回日本都市計画学会学術研究論文集 pp.715-720,1992
9. 松島洋介,奥敬一,深町加津枝ほか:琵琶湖西岸の里山地域における地元住民と移住住民の景観認識の比較、ランドスケープ研究 71(5) pp.741-746,2008
10. 吉村晶子:原風景の生成に関する研究:ランドスケープ研究 67(5),pp.731-726,2004